

小学校英語教育への取り組み ——近隣の小学校での英語活動支援——

酒 井 藤 恵
矢 田 裕 士

0. はじめに

文部科学省の2005年度の調査⁽¹⁾によると、公立小学校（以下、小学校）において何らかの形で英語学習を実施している学校は93.6%に至り、6年生では90.3%、年間平均で13.7単位時間（1単位時間は45分）実施されており、小学校1年生においても75.1%という高い実施率が見られる。

国際化社会におけるグローバル化の波を受け、英語の需要はますます高まっている。中央教育審議会（以下、中教審）では小学校段階における英語教育の充実を図る方向で、今後英語を正式の教科にする方策も検討されている。

東京家政大学文学部英語英文学科（以下、本学科）においても、小学校における英語教育、早期英語教育に興味・関心をよせる学生数が近年増加してきた。そのような状況に鑑み、教職課程履修者のうち、小学校で英語を教えることを希望する学生を対象とした児童英語教育関連科目を設置した。これに付随して近隣の小学校との連携が始動した。小学校における「英語活動」の参観やティーム・ティーチングへの参加などの一連の活動を通して、学生が小学校現場での指導経験を積む枠組が確立しつつある。

以下では、まず、小学校における「英語活動」について、その現状と今後の必修化に関して述べる。次に本学科の所在地である埼玉県狭山市、及び隣接する入間市における小学校での英語教育の現状について紹介し、それぞれの自治体の小学校と本学科との英語活動における連携について、2003年度～2005年度の活動のあらましを述べることにする。

1. 小学校における「英語」の必修化の問題

小学校における英語の学習は1990年代には研究開発学校でのみ実施されていた。しかし、2002年度施行の新学習指導要領により全国の小学校で「総合的な学習の時間」などを用いて「国際理解教育」の一環として「英語活動」という名称で実施することが可能になった。その結果、前述したように2005年度には、何らかの形で英語学習を実施している学校は22,232校のうち20,803校にのぼり、実施率は93.6%と、前回調査(16年度：92.1%)を1.5%上回っている。

2006年3月中教審の外国語専門部会は、小学校における英語活動の教育課程上の位置づけに関して次のような提言を行っている。

「小学校における英語教育は、3年生から始めることとし、3年生及び4年生では、総合的な学習の時間のうち年間20単位時間程度を英語活動に充てる。5年生及び6年生では、総合的な学習の時間から独立して「英語」という領域を新設し年間35単位時間(週1時間)を英語教育に充てる。」

(下線は筆者)

この提言は中教審でのこれまでの英語活動に関する審議状況の整理としてなされたものであり、英語は必修科目となるが「教科」とするのではなく「領域」、すなわち、道徳や特別活動と同じ位置づけとなることに留意すべきであろう。今後、この提言を受けて中教審全体でさらに議論が続いていくことになるので、この「英語活動」が「英語」という教科になるのかは、衆目の一致するところであり、実際に必修科目となるだけでも数年先のことと思われる。

必修化の問題と並行して教員養成・採用に関しても制度を整えていく必要があるが、当面は学級担任、あるいは担当教員(学級担任以外の英語教育を担当する専科教員)とALT、また、学級担任と英語が堪能な地域人材等とのチーム・ティーチングという、現在の指導体制が続くものと考えられる。

以下に、地域の小学校と本学科との連携について、年度毎にその活動につ

いて述べることにする。

2. 2003年度取り組み

2.1 埼玉県狭山市における「英語」

埼玉県は、2005年度、小学校で「英語活動」を実施した割合が99.2%となっている⁽²⁾。全国平均が93.6%であることからすると、埼玉県の実施率は極めて高いと言える。

埼玉県の中でも本学の所在する狭山市は、2003年5月23日に小泉内閣の構造改革特別区域推進計画による「外国語早期教育推進特区」に認定された。これにより、小学校学習指導要領の「国際理解教育の一環としての英語活動」という規制の枠組みを超えて「教科」として英語を教えることができるようになった。狭山市教育委員会は狭山市立山王小学校 田中晃一校長(当時)を委員長とし「小学校英語教育推進委員会」を設立し、狭山市での英語教育の目標を「英語のコミュニケーションへの積極性の育成」と定め、英語活動のシラバス集「狭山市小学校英語活動指導資料」を作成した。これにより同年9月から市内17校の小学校のうち、7校で英語授業が開始され、翌年2004年4月から市内の全小学校で実施となった。英語の指導者としては、学級担任と「英語活動指導員」⁽³⁾、及び、「語学指導助手」が挙げられる。ここで言う「英語活動指導員」は狭山市が独自に採用している英語が堪能で児童英語教育にも精通している地域人材である。25名が17校の小学校に1、2名ずつ派遣され、学級担任とチーム・ティーチングで英語を指導している。「語学指導助手」は市内の各中学校に1名ずつ配置されている英語母語話者のALTのことであるが、彼らが隔週で小学校にも赴き、小学校での英語学習を支えている。

英語の授業時数は2004年度から1・2年生が年間10時間、3～6年生が35時間実施されている。

2. 2 狭山市立山王小学校との連携

狭山市が「外国語早期教育推進特区」に認定され、導入段階として、まず7校で英語の授業が開始されたが、本学科では7校の中でも先駆的な英語教育を実践している狭山市立山王小学校との連携を希望した⁽⁴⁾。そして山王小学校 田中晃一校長(当時)のご協力を得、本学科教職課程履修者の山王小学校英語授業への参観が実現した⁽⁵⁾。

2. 2. 1 山王小学校の「英語」

2. 1で述べたように、狭山市の小学校では、主として学級担任と「英語活動指導員」がティーム・ティーチングにより英語を教えている。

山王小学校の「英語活動指導員」は加藤みどり氏と木村利香氏の2名である。加藤氏は元高等学校英語教諭で授業実践の経験が豊富な方で、自宅でも長く児童に英語を教えている。木村氏は中学時代をニューヨーク現地校で過ごした帰国子女であり、児童英会話教室でも講師の経験がある。両氏とも「小学校英語活動研究会東京ネットワーク」⁽⁶⁾に所属し、研修を通じて日々新しい歌やアクティビティ収集に努めておられ、児童英語教育に精通されている。

授業体制は加藤・木村両氏が週に3回ずつ1年生から6年生までの英語活動を担当している。指導内容は「狭山市小学校英語活動指導資料」のシラバスを基に、さらに工夫を加えた授業展開を試みている。

2. 2. 2 山王小学校での授業参観

2003年度、山王小学校へは英語教育研究のゼミに所属する学生が中心となり、合計2回、計25名が授業参観のため訪問した。

以下は学生が参観した小学4年生に対して行われた英語の授業の指導案から一部転記したものである(括弧内の日本語の説明は筆者による)。

<題材>How many～?

<指導の展開>

1) Greeting

2) Warm up song: "The Hokey-Pokey"

3) Useful expressions: "How many～?"

"How many eyes do you have?" "I have two eyes"

"How many fingers do you have?" "I have ten fingers."

4) Activity-①: Monster Drawing

(グループに分かれ How many～? を使いながらモンスターの顔を黒板に仕上げていくというアクティビティ)

5) Activity-②: "How many apples in the box?"

(グループに分かれ、グループ内で順番を決め、箱の中におもちゃの果物をいくつか入れ、それを他のメンバーに How many～? を用いて数を当てさせるゲーム)

6) The Monkey and the Crab

(日本の昔話「猿かに合戦」の英語版を基に、前時に簡単な英語の台詞が提示されており、児童は暗唱をしてくれている。本時はその台詞の暗唱と次の場面の台詞の提示と練習を行う)

7) Greeting: Good-bye song

授業は全て英語で行われ、児童が理解できなかった英語の指示を学級担任が適宜日本語で説明をしていた。全体的に非常にテンポよく活気溢れる授業で、児童はタイプの異なるアクティビティを次々とこなし、"How many eyes do you have?" "How many apples do you have?" などの例文を使いこなし、スムーズに授業は進められた。

3. 2004年度の取り組み

3. 1 埼玉県入間市における「英語活動」

狭山市と隣接する入間市は、狭山市のように「構造改革特区」には認定されていないが、市内にある16校の小学校全てで「国際理解教育」の一環としての「英語活動」が行われており、「国際理解教育」及び「英語活動」に熱心な地域である。しかしながら学校間で年間の「英語活動」の時間配分に

は若干の差があり、今後は正が必要であろう。

3.2 入間市立豊岡小学校との連携

山王小学校の田中晃一前校長が2004年度に入間市立豊岡小学校へ転出し、豊岡小学校長（当時）となられたため、この年度より豊岡小学校と本学科との連携が始まった。豊岡小学校は本学から徒歩6、7分の最も近接した小学校であり、地域連携を図る上で非常に便がよい。学生が「英語活動」を参観したり見学したりする場合には授業の空き時間を有効に利用することができる。

3.2.1 豊岡小学校での「英語活動」

豊岡小学校では2002年度より「総合的な学習の時間」に「英語活動」を実施していたが、2004年度に田中校長を迎えたことにより、英語シラバスの充実や学習環境の整備などが一層図られ、充実した授業内容と時間数が確保できることとなった。

この年度の「英語活動」は毎週金曜日の5・6校時に設定され、年間授業時間数は1・2年生が10時間、3～6年生が24時間であった。授業者は学級担任と入間市が採用したALT（英語母語話者）とでチーム・ティーチング形式が取られた。後述するが、本学科の学生もチーム・ティーチングに参加することになった。

指導内容は、狭山市の「狭山市小学校英語活動指導資料」等を参考に、豊岡小学校の教職員が考案し、指導資料「英語活動（英語となかよし）」に収録した。入間市では「国際理解教育」の一環としての「英語活動」を目指しているため、第1学年に「韓国の昔話」、第2学年に「中国に触れよう」「オランダの文化に触れよう」、そして第3学年以上の学年に「ALTに出身国のことを紹介してもらおう」などの単元が設けられていることが特徴である。

2004年度のALTはC. Walker, D. Mungo, J. Savage, J. Percy, S. Narvaez, S. Norman, H. McDonaldo各氏の7名であった。

3.2.2 豊岡小学校での「英語活動」ボランティア

山王小学校では授業参観という形で学生を受け入れていただいたが、豊岡小学校では、「英語活動」のチーム・ティーチングに直接参加する機会に恵まれた。

本学科の3年生以上（大学院生を含む）の教職課程履修者の中で、特に小学校英語に興味・関心がある者が「英語活動ボランティア」となった。この年度は14名が中心となって活動した。5校時に参加できる者は5校時前の休み時間までに、6校時に参加できる者は6校時前の休み時間までに小学校に赴き、ALTと打ち合わせをしてから授業に望んだ。ALTは第3～第6学年⁽⁷⁾までの学級に配属されており、学生も前もって配属された学級の「英語活動」に参加した。

授業中の学生の役割は、まず第一に、授業で行われる様々な種類のアクティビティを児童と共に行うことである。活動形態はクラス一斉、グループ・ワーク、ペア・ワークなどがある。いずれの形態の時も、学生は児童の活動に参加し、児童がタスクの意図を理解し、英語でタスクを遂行できるか観察し、積極的に活動ができるように促したり励ましたりする。ALTの英語での指示が理解できない児童やグループ、またはペアには指示を繰り返したり、言い換えたりする。

また、ALTの英語による指示を必要に応じて日本語に訳すことも学生の役割である。ALTは基本的に授業を全て英語で行うことが要求されている。そのため、どの児童も一様に理解できるわけではない。そのような時に、学生はALTの発言を日本語に訳すのだが、逐語的に訳すことは望ましくない。頻度は抑える必要がある。また学級担任が日本語訳を言う場合もある。以上のような種々の状況を臨機応変に判断して、学生ボランティアは授業に参加することが要求される。初めのうちは慣れなくても、回数を重ねていくうちに徐々に慣れてその場の状況に最適と思われる方法で対処していけるようになる。また学生ボランティアは、学級担任とALTとがよりよいコミュニケーションをはかるため、話し合いに加わり、補佐をすることもある。

以上のような役割を通じて、学生は小学校における「英語活動」の具体的な実践、ティーム・ティーチングの実際とその効果、アクティビティの種類とそのやり方、アクティビティに参加する児童の様子、学級担任の現場での仕事と「英語活動」への係わり、語学教育における母語の役割、児童の英語習得の過程、など、もろもろの事象を目の当たりにする貴重な経験ができるのである。

3.3 狭山市立入間川東小学校との連携

前述した狭山市立山王小学校における授業参観に参加した学生たちの小学生に対する英語活動に興味・関心の示し方が大変大きかったことから、さらに近隣での小学校との提携・連携を模索していた折、本学の教職教養科の正木義晴教授を介して、平成16年に狭山市立入間川東小学校の広沢和夫校長を紹介され、本学科教職履修学生を随時、受け入れて頂くこととなった。同小学校は本学からバスで10分ほどの至近距離の狭山市街地にあることから、往復時間が短くて済み、学生たちにとっては授業の合間を縫っても容易に訪問できる利便性が大変魅力であった。

入間川東小学校の「英語活動」は竹の子学級と命名された特殊学級の1、2年生のクラスは月に1回のみで、その他のクラスはすべて毎週1回の授業時間が割り当てられていた。1、3、4年生の指導者はそれぞれの学級担任教員と英語活動指導員の重光氏、また2、4、6年生と竹の子学級はそれぞれの学級担任と英語活動指導員の金岡氏の担当があたっておられた。各学年とも3クラス編成で、総クラス数18学級があり、「英語活動」の週延べ総時間数は18時間であった。

教授会の承認を得た後、前期・後期に各1回ずつ、延べ30数名の学生が同校の英語活動の授業を参観させて頂いたり、小学生の英語活動グループに参加させて頂き、小学校における「英語活動」を実体験するという貴重な機会を得ることができた。

4. 2005年度の取り組み

4. 1 入間市立豊岡小学校との連携2年目

前年に引き続き、豊岡小学校で「英語活動ボランティア」を行った⁽⁸⁾。この年度は、17名の応募者があり、そのうち大学院生と4年生はほとんど全員が昨年度の経験者であったため、「英語活動ボランティア」の役割を熟知しており、新たに参加した3年生の良いモデルとなった。また大学にて適宜事前ミーティングを開き、小学校でのよりよい活動を目指した。

この年度の豊岡小学校 ALT は7名で N. Mitchell, A. Korsund, R. Wilson, J. Wang, K. Picadura, M. Dauro, J. Kellum の各氏である。

「英語活動」は前年度同様、毎週金曜日の5・6校時に設定された。年間授業時間数も前年度と同じである。11月には豊岡小学校における2年間の「国際理解教育」及び「英語活動」の成果を発表する研究大会『英語活動から国際理解を深める ～異文化理解を通して子供の心を豊かにする～』が開催され、多くの参観者を迎え盛況のうちに閉会となった。学生も通常通り「英語活動」の授業に参加した。以下はこの日の「英語活動」の様子を当日の配布資料『公開授業指導案』から3年生の指導案を抜粋したものである（括弧内は筆者による）。

<ねらい>動物の言い方に慣れることができる

<指導の展開>

- 1) あいさつをする
- 2) 歌を歌う："Seven Steps"
- 3) チャンツをする：挨拶チャンツ、数字チャンツ
- 4) 動物の言い方を練習する：lion, panda, dog, monkey, rabbit, elephant, cat, pig など
- 5) いろいろな動物の鳴き方を知る（動物の絵を示しながら、いろいろな動物の鳴き方を想像させ、当てさせる。ALT がデモンストレーションとして、鳴き声を真似する）
- 6) ゲームをする：みあってミァオ！ アニマルバスケット（みあってミァ

オ！は動物の鳴き声を当てさせるゲーム。アニマルバスケットはフルーツバスケットと同じルールで円になって椅子に座り、鬼が名前を言った動物の児童のみが席を立てて自分が今まで座っていた席とは異なる席に競争で座するというゲーム)

ALTは授業中、全ての英語活動を英語を用いて行い、聞き取りが難しいと思われる箇所は学級担任やボランティア学生が適宜、日本語に訳した。ボランティア学生は児童の中に入って英語の歌を歌ったり、動物の絵を見やすく提示するなど、授業がスムーズに進行できるよう援助することに勤めた。

5. 終わりに

国家戦略的に日本における英語教育の充実が焦眉の急という時代に入り、文部科学省により中学校・高等学校・大学などの英語教育改革が強く求められているばかりか、新学習指導要領がスタートした平成14年度より全国の小学校約22,800校で「総合的な学習の時間」の中で英会話・国際理解教育など英語関連の授業が導入された。近隣では狭山市・新座市・戸田市・荒川区・北区等のいわゆる「英語教育特区」に指定された地域ではかなり本腰を入れた取り組みが始まっている。この動きに呼応するべく、今後、求められる日本の早期英語教育に対応する人材育成のために英語英文学科でも平成18年度より新カリキュラムに小学校での英語活動・指導を念頭に入れた新規科目名を導入した。その科目名と履修内容は次の通りである。(1)[児童英語活動論Ⅰ,Ⅱ]児童英語活動論Ⅰでは小学生を対象にした英語教育論について学ぶ。特に国際感覚、異文化理解、英語コミュニケーション能力などの視点から小学校の英語学習で求められる能力について基本的な学習をしていく。児童英語活動論Ⅱでは児童英語活動論Ⅰの基礎の上に、さらに小学生を対象にした英語教育論全般について、実践的コミュニケーション能力養成の望ましいあり方や第二言語習得理論研究の理論的背景など児童英語活動について幅広く、かつ深く学習していく。(2)[児童英語教育ワークショップⅠ,Ⅱ]

児童英語教育ワークショップⅠでは小学生を対象にした英語指導で求められる様々な指導技術、各種教授法やアプローチについて学習し、模擬授業などを通じて実践的な指導法を獲得していく。児童英語教育ワークショップⅡでは児童英語教育ワークショップⅠの基礎の上に、さらに高度な手法について学ぶ。特に学習者の英語学習に対しての興味、関心、意欲を高めるための教材作成のあり方や、効果的な音声指導や各種視聴覚機器の活用法なども含めて、実践的な言語活動、アクティビティと学習指導法について学習する。(3) [児童英語教材研究Ⅰ,Ⅱ]児童英語教材研究Ⅰでは英米の児童を対象にしたナーサリーライム、マザーグース、絵本、童話、英語の歌、ジャズチャンツなどの基礎について学習し、日本の小学生を対象にした英語指導での活用法について研究する。児童英語教材研究Ⅱでは児童英語教材研究Ⅰの基礎の上に、さらに幅広く、かつ深く、ナーサリーライム、マザーグース、絵本、童話、英語の歌、ジャズチャンツなどについて学習し、日本の小学生を対象にした英語指導での効果的な活用法について研究する。

周知のごとく、現在のところ「小学校で英語の指導ができる人」を認定するための統一資格制度は確立されていないが、いずれ小学校教育現場へ良質な英語指導者を供給するために「小学校英語指導者認定」をする公的な資格制度や養成機関が設立されることが予想される。現在、本学でも実施している教職履修者を対象としたいわゆる「教育実習」に匹敵するものとして、当然のことながら、小学校英語指導者にも英語教育関係の講義・理論ばかりではなく、現場での実践的な体験をすることが強く求められていくことになると思われる。前述したように、このような将来の動向を先取りして本学の英語英文学科では、数年前より狭山市立山王小学校、入間川東小学校及び入間市立豊岡小学校に、原則として英語科教育法Ⅰ,Ⅱが履修済みで現在、英語科教育法Ⅲ,Ⅳを履修中の学生たちを派遣してきた。本学では、このような小学校英語活動支援が自主演習として教育課程の一環として位置づけられている。今後、このような狭山市や入間市の小学校との連携関係に止まらず、地域中心型の教育体制は、2年前に本学部に正式に発足した「地域連携協力

推進センター」が狭山、入間市役所及び同教育委員会との定期的な会合を開催して相互に協力していくことがすでに決定されており、狭山・入間市等の地域社会における小学校での英語活動・指導、教員養成、講習会など様々な形で地域貢献しつつ、同時に、本学の学生たちに実践の場を提供すべく努力していきたいと考えている。

謝 辞

本学科と狭山市立山王小学校、入間市立豊岡小学校との連携を実現することができたのは一重に田中晃一先生（山王小学校校長、豊岡小学校校長（当時））のご尽力による。改めてお礼を申し上げる。ならびに狭山市立入間川東小学校長の広沢和夫先生にも大変お世話になった。本稿を書くにあたり、豊岡小学校 田中久雄教諭、狭山市立教育センター指導主事 和田雅士氏、狭山市立山王小学校英語活動支援員 加藤みどり氏、木村利香氏にご協力をいただいた。ここにお礼を申し上げる。

註

1. 詳しくは、文部科学省 HP「平成 17 年度小学校英語活動実施状況調査」を参照されたい。
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/18/03/06031408/001.htm
2. 埼玉県庁教育局義務教育指導課において 18 年 4 月 10 日、教育長が行った記者会見上にて発表。詳しくは 4 月 11 日、埼玉新聞、及び産経新聞（埼玉版）掲載の記事を参照。
3. 「英語活動指導員」は 2006 年度より「英語活動支援員」に名称が変更されている。
4. 「外国語早期教育推進特区」としての山王小学校（田中晃一校長（当時））の取り組みについては朝日新聞「特区をゆく」（2003 年 10 月 12 日）を参照されたい。

5. 狭山市内の小学校と本学との地域連携は、2002年度より「狭山フレッシュ支援事業」という名のもとで開始されていたが、英語教育に特化した連携としては、山王小学校との関係が初めてのものである。
6. 公立の小学校教員を中心とする会。会員数 237 名。代表は文京学院大学女子中学校校長である佐々木賢氏である。
7. 第1学年と第2学年は年 10 回の「英語活動」時間数のため毎週授業は設定されていない。
8. この年度の豊岡小学校と本学科の連携については「日本教育新聞」や「広報いるま」などにも記事が掲載された(2006年1月2日)。